



旧出津救助院のある出津集落は「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産として世界文化遺産に登録されている。

ながさき  
洋食  
物語  
Western foods  
in  
Nagasaki

小さな建物から  
生まれた  
日本初のパスタ

キリシタンの里として知られる長崎市外海地区では、一人の神父の物語が語り継がれている。二百五十年にわたって続いた禁教政策に終止符が打たれ、潜伏キリシタンが少しずつカトリックに復帰していた一八七九年、マルク・マリー・ド・ロ神父は主任司祭として、この地に赴任した。

# 外海 パスタ発祥の地



Marc Marie de Retz  
1840 ~ 1914  
ド・ロ神父 晩年  
(お告げのマリア修道会提供)

未亡人や若い女性たちの自立を支援した。出津集落に建てられた旧救助院には綿の紡績・染色・製織、パンの製造などが行われた授産場をはじめ、薬局や鯛網工場などが残されている。

だったと話す。「当時、パスタは長崎の居留地に暮らす外国人から注文を受けて作っていました。素麺の二倍から四倍の値段が付く、しかも一年中製造できることから、パスタは貧しい女性たちを経済的に支えてくれる存在でした。」

十四年の生涯を閉じるまでこの地の人々に寄り添い続けた。

敷地の中にひっそりと佇む小さな蔵のような白い建物。ここが日本で最初にパスタが作られた「マカロニ工場」だ。ド・ロ神父は西洋から取り寄せたマカロニやパスタの製造機を設置し、集落の女性たちに製造方法を伝授。ここで数多くの種類のパスタを作っていたという。

また外国人だけでなく、長崎を訪れた日本人へのお土産としても喜ばれたそうです。

ご自分の日常の業を行いながら、神様の愛や喜びを伝えた方でした。私もそのように生きたいと心から思います。」

シスターの赤窄誠子さんは、救助院にとってパスタは特別な食品

ド・ロ神父が布教のために来日した一八六八年、日本ではまだキリシタンへの弾圧が続いていた。若きド・ロ神父は死を覚悟して日本の地を踏み、禁教の高札が取り除かれた後は、外海地区の人々の魂と生活を救うために奔走し、七

赤窄シスターは「ド・ロ神父は温かな響きがあふれる。時を越えても、敬愛の念は色あせることはない。」



マカロニ工場全景。手前に見える「ド・ロ壁」は、赤土に石灰を混ぜたものを接合材として用いて、地域で産出される岩を積み上げた丈夫な壁で、これもド・ロ神父が伝えたもの。

当時の製法で作られた「ド・ロさまパスタ」は今も健在。

ド・ロ神父によって建てられた授産場。

国指定重要文化財に指定されている「マカロニ工場」。ド・ロ神父はパスタのことを「西洋の素麺」と呼んでいたという。

# SO TOME